



Title	1950年代伝統論争における和風建築批判と反論：吉田五十八の事例に着目して
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65018
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1950年代伝統論争における和風建築批判と反論

— 吉田五十八の事例に着目して —

羽藤広輔／信州大学

はじめに

1950年代の建築界における伝統論争は、主に、川添登（1926-2015）が編集長を務めた『新建築』誌上において、丹下健三（1913-2005）などの建築家達が、伝統と創造の問題についてそれぞれの主張を展開したものであり、その中で和風建築、特に数寄屋建築に対する批判が多数見られた。池辺陽（1920-1979）の論考「和風建築と現代のデザイン」（『新建築』1955.6／以下「池辺論文」）は、その代表的な例と言える。しかしながら、後の同論争の総括のされ方を見ると、丹下の言説や作品、および白井晟一（1905-1983）によって提示された縄文・弥生の対比による伝統理解の構図等に焦点を絞ったものが多く、堀口捨己（1895-1984）設計の「サンパウロ日本館」（1955）に関する論争を除き、和風建築批判の実態については、ほとんど触れられていないのが現状である。

したがって本研究では、同論争における和風建築批判と、それに対する和風を手がけた建築家、特に吉田五十八（1894-1974）の反論、及び、同時期の吉田の伝統観の内容について、エッセー、対談記事、設計要旨といった1950年代（1950.1-1959.12）の吉田の著作を資料とし、池辺論文が発表された1955年6月を1つの時期的境目と捉えながら、吉田の主張の内容や変遷について明らかにする。

1950年代『新建築』誌にみる和風建築批判

前述の池辺論文で池辺は、具体的事例として堀口と吉田の作品を挙げており、吉田の作品については、「日本的な形は完全に表面の

アクセサリのようなものになっており、（中略）技術自体の生命力を失っている」と厳しく批判している。続いて池辺の主張は、趣味・再現の問題と、社会・技術の立場から展開され、前者について、和風建築は、視覚的快適さを求めた、趣味の芸術である、と捉えた上で「芸術は快よさの追究ではなく、人間の創造の行為である」と主張し、建築家の、古典再現者としての立場に一定の理解を示しつつも「それは創造とは全く異なつた役割」であるとして、あくまでも建築における「創造」を重視している。また、後者について、和風建築は、そのままでは現代の生活に適合せず、「和風建築によつて支えられる生活は特殊な階級・生活にすぎない。そのことはこれらの多くが現在料亭や旅館、一部の富裕階級のためにのみつくられていることから示されている」とし、「民衆」の視点から和風建築のあり方を批判している。当時の和風建築批判の論旨を読み取る際に重要となるのが、この「民衆」の視座の重視であり、白井や浜口隆一（1916-1995）も同様の視点から、数寄屋建築を批判している。

1950年代前半の吉田の伝統観

同期間におけるエッセーや対談記事に見られる吉田の伝統観には、「雰囲気」の重視、「プロポーション」や独自の「木割」の重視、日本建築の発展を見据えた「大壁」建築の擁護、堀口らによって形成された戦前からの伝統理解との同調といった特徴が見られた。

また同期間の設計要旨にみる吉田の伝統観には、「雰囲気」の重視、和洋の結び付けの

提案、伝統建築評価における現代性の重視、料亭建築設計の悪条件への言及、料亭建築への評価といった特徴が見られた。

料亭建築に関する言説で注目されるのは、最後に挙げた内容であり、「T 料亭・東京築地」の説明文（『国際建築』1954.2）では、「近頃の料亭は戦前のそれと違って、料理法がとみに発達したため、その競争点が料理そのものより、建物に移行した観が多分にある」とし、料亭の建築を、建築家の腕が試される、好課題であるとの認識を示している。

1950年代後半の吉田の伝統観

同期間におけるエッセーや対談記事にみる吉田の伝統観には、料亭建築への懐疑、伝統建築評価における現代性の重視、「プロポーション」や独自の「木割」の重視、「民衆」への言及、「雰囲気」の重視といった特徴が見られた。

エッセー「豊・男・女」（『日本経済新聞』1955.8.7）は、1950年代の和風建築批判の論調をはじめ意識して書いた文章だと考えられ、料亭建築への懐疑の様子が伺える。花柳界とのつながり等を意識した形で、料亭建築のあり方に言及しているが、それに対する明確な主張はなく、結果としては、茶化した態度のみが、浮き彫りになっている。

1958年のエッセー「建築に盛る平安朝」（『東京新聞』1958.3.11夕刊）は、和風建築批判に対し、最も正面から応じた内容となっている。同年に発表した自身の作品（「明治座」や「日本芸術院会館」）に「平安朝」の要素が見られるとして、「平安朝にいちばん近代味がある」と説明しており、伝統建築評価における現代性の重視の特徴が見られる。また同エッセーでは、自身の仕事が日本的情緒主義とか、ふん囲気主義と指摘されていることに言及し、「情緒もなけりゃあふん囲気

もない住宅なんておよそつまらない」と吉田なりの語り口で反論している。さらに料亭建築の仕事については、あまりやっていないとした。

続いて、1950年代後半の設計要旨にみる吉田の伝統観には、様式混合の提案、伝統的住居の改革、「雰囲気」の重視、伝統建築評価における現代性の重視といった特徴が見られた。

「日本芸術院会館」の説明文（『新建築』1958.7）では、「平安朝」について、前掲の1958年のエッセーと同様の内容が見られた。

おわりに

吉田の主張において1950年代後半になって変化したのは、「民衆」という語を使用する機会が増えた点、および、それまで、建築家の腕が試される好課題であるとの認識を示していた料亭建築について、50年代後半になると一転して、あまりやっていないと言及した点であり、当時の和風建築批判の影響を見て取ることができる。そうした中、和風建築批判の論調を踏まえた上での、吉田のまとまった考え方が示された言説が、1958年3月の「建築に盛る平安朝」であると言え、情緒のない建築などつまらないと主張しつつ、当時、新たに登場した縄文・弥生の対比による伝統理解のあり方に応ずるように、最も日本的なものとして「平安朝」を挙げ、これに一番「近代味」があったとした。

以上のように、吉田は堀口のように、真正面から批判に反論しようとはしなかったが、当時の和風建築批判の論調に影響を受け、自らの言説を調整しつつ、「日本芸術院会館」という実作を伴った、「平安朝」という形で、独自の伝統観を示すに至ったと言えよう。